

イチゴの新品種とその特性

野菜試験場久留米支場 本 多 藤 雄
栽培研究室長

はじめに

最近のイチゴは出荷期が早いほど高価なため、促成栽培が増加しており、露地、あるいは半促成栽培用の休眠の深い品種を無理な方法で栽培するため、病害や生理障害が発生してきて、新しい品種の出現が望まれている。

このような時に比較的休眠の浅い品種が育成されて、促成栽培に挑戦しようとしている。最近園芸学会で発表された新品種“ベリースター”，および“ひみこ”がそれで、これら新品種について特性と栽培の要点について述べたい。

ベリースターの特性（埼玉県園芸試験場育成）

休眠は浅く、生育はおう盛であるが、葉色はうすい。花芽分化は10月上旬で宝交早生と同程度、ダナーより約5日早い。花芽分化後、花芽の増加が著しい。果数型で着果が多く、また果実も大きい。したがって果実の収量は多く、標準育苗により、1月上旬から収穫が始まり、2月中旬を最盛期として4月末日までにa当たり400kg以上となる。

果実はやや丸型の紡錘形であるが、生育がおう盛で、肥料の吸収が多いと頂果は奇形になりやすい。果皮は軟かく、空洞が大きい。光沢のある鮮紅色で、香りが高い。果実の成熟に要する日数は45…50日である。果実の糖度は低温管理によって増加するが、高温で管理するとぼけやすく、糖度は低くなる。酸度はダナーと宝交早生のほぼ中間である。

ベリースターは“はるのか”と“四季成”の交配種であるため、生育おう盛で、いおう病など土壌病害には比較的強いが、うどんこ病には罹病しやすい。

ベリースターの栽培の要点

苗の生育がおう盛なので、肥料が多く吸収されると、花芽の分化が遅れやすいので、育苗の後半

は肥料が切れることが望ましく、また黒寒冷紗により遮光育苗を行う。

定植期は9月中、下旬。ビニール被覆期は10月15～25日とする促成栽培に適し、ビニール被覆後のハウス内の温度は日中25～28℃、夜5℃に管理する。低温で管理するほど果実の品質がすぐれるので、温度管理を厳重にする。地中加温を行うと収穫が早くなり、とくに2～3月の収量が増加する。

はるのかや宝交早生より生産がすぐれるので、電照栽培や、ジベレリン散布を行うと伸長しすぎるので、特別に処理を行わない促成栽培がよい。

立性なので1.2m2条植、条間30cm、株間15cmの密植栽培が可能で、多収穫が期待できる。

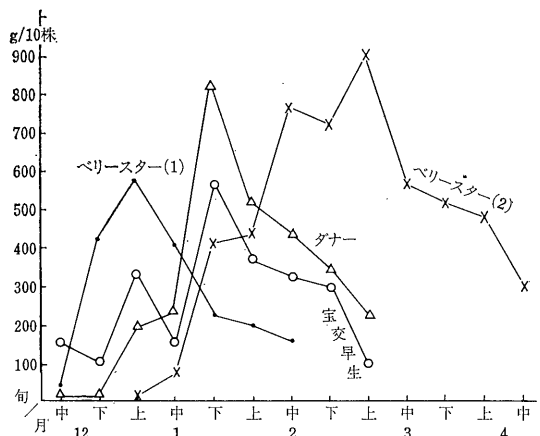
適応地域は関東以南の暖地であるが、果実の性質から市場に近いところで栽培が増加しよう。

ひみこの特性（野菜試験場久留米支場育成）

ダナー、宝交早生、八千代という寒地から暖地

第1図 促成栽培による品種別収量の推移 (1973)

(埼玉)



ベリースター(1) 11月1日植 シャ育苗, 地中加温

ベリースター(2) 10月25日植 地中加温

宝交早生} 10月25日植 電照, 暖房
ダナー }

までの半促成栽培用品種が親となっているので、八千代のように休眠が浅く、宝交早生のような着果性を持ち、ダナーのような肉質をもった品種と考えてよく、関東から九州までの幅広い適応性をもつ。半促成栽培品種であるため、はるのかや、ベリースターに比べると休眠はあるが、宝交早生やダナーに比べると休眠は浅く、促成栽培にも適応する。

草勢はおう盛で、葉は濃緑色、発根が早く、大きな根を発生するので、肥料があると大苗になりやすく、花芽分化が遅れやすい。小葉が5葉になりやすく、同化力は高い。着果数多いうえに、連続的に果房が発生するので収穫量は多く、促成栽培で12月下旬より収穫始め、1月～4月まで毎月1～1.5トンの収穫がえられ、4月までに4～5ト

ンは可能である。やや開張性のため、着果が多いと株疲れしたようにみられやすい。

果実は球、または紡錘形で、濃赤紅色、果実はよくつまり、空洞が全くなく、多汁質である。糖度高く、酸味はとくに高い。果肉はかたいが、果皮が軟らかい。肉質はきわめてすぐれ、食味もよく光沢がとくにすぐれ、芳香をもつ。頂果は大きく縦みぞが出やすく、ジャンボ果になりやすい。

うどんこ病、いおう病に耐病性をもっている。

ひみこの栽培の要点

苗の発育がすぐれるうえ、強い大きな根が出て吸肥力がおう盛なので、花芽分化が遅れやすいが苗床で肥料が切れるように施肥し、むらして株の発育を整え、黒寒冷紗による遮光と、シルバーポリトウによる短日処理を行えば、花芽分化は約10日前進する。

花芽分化ははるのかより遅く、宝交早生と同時期とみてよい。

定植期は9月下旬、ビニール被覆は10月20日を適期とする促成栽培に適するが、宝交早生のような高温密閉栽培を行うと、葉やけが発生しやすいので、ビニールハウスは日中換気して25℃以下に保つ。

低温には比較的強いが、5℃程度に最低温度を保つ。

促成栽培ではややわい化をを起こすので、11月上、中旬にシベレリン10ppmを散布することによってわい化を防ぎ、あるいは11～1月の電照栽培によって葉柄を伸ばし、葉面積をまし、収量を増加することが可能である。

葉が開張性のため密植栽培は困難であるが、120cmうね2条、条間30cm、株間20～25cmがよい。

生育後期高温になると、果皮がいたみやすいので、換気して品質管理を行う。

株の発育に対して果実の着生、肥大がよいので常にかん水、ならびに液肥の追肥を重点とし、元肥には10a当たりN 6kg、P₂O₅ 15kg、K₂O 6kgを基準とし、堆肥など有機物を多く施す。

果実の形、果質などから、できるだけバラづめできる容器を考慮する必要がある。

第2図 促成栽培における電照の効果 (1975)
(久留米)

